

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-21

学校名・団体名	横浜市立白幡小学校
HPアドレス	http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shirahata/
コース	学校支援
活動・研究テーマ	アクティブ・ラーニングの能力育成とカリキュラム開発
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>これまで研究を重ねてきたシステム「白幡スタイル」、自主的な学習力の育成、協働学習の在り方は、正しく、昨年の文部科学大臣の諮問の中にある、アクティブ・ラーニング（課題発見と解決に向けての主体的協働的に学び合う力の育成）に位置付けられる。21世紀グローバル社会に必要な豊かに学び合う力の育成に結びつくものとして、具体的な指導方法等を明らかにするとともにカリキュラムを改善し整備してきた。本研究は、昨年8月の教育課程特別部会の『論点整理』とも重なった。11月14日(土)には、全国に向けて成果と課題を提案し、全国より1100人の参加者を迎えての盛会となった。これからの時代の日本の子ども学力向上への一助になればと願う。</p>	

1 研究テーマ、その経緯とねらい

これまでの研究から、思考力・判断力・表現力の育成のためには、児童の協働学習を基盤として児童自ら問題点を発見したりグループでコミュニケーションしたりしながら解法を共有し、知を再構築していくプロセスを重視していくことや、教科横断的な論理的思考の語彙やプロセスに焦点を当てて実践研究をしていく必要性が明らかになった。また、カリキュラムの軸を整えた条件づくりとして、『学校全体がカリキュラム』を合言葉に、児童・家庭・地域にも分かるよう学んだことを掲示物やファイルにして可視化し環境を整備してきた。児童の学力学習状況も自己肯定感が高く上昇傾向にある。

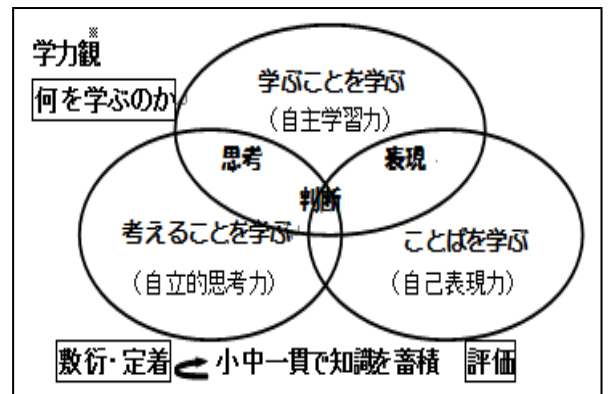
研究を重ねてきたシステム「白幡スタイル」(自主的学習力を付けること、協働学習の在り方)は、平成26年11月20日文科科学大臣諮問にあるアクティブ・ラーニング(課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習)と軌を一にしていると捉えた。21世紀グローバル社会に必要な豊かに学び合う力の育成に結び付くものと考え、本研究主題を設定し、学校・学年協力体制を基盤として研究を一層深めていくこととした。「国籍も言葉も違う人々が集まって、世界の難しい課題の解決に向けて話し合うことが日常的になる日が来る。そんな時、『じゃあ、私が』と先頭に立って議論をまとめ、 アイデアを出し、報告書を作る。そんなことができる子どもたちにしたい。」(朝日新聞2014/01/04 神奈川県版掲載)本校の目指す子どもの姿は、21世紀型スキル・OECDが求める学力にも重なった。

2 研究の方法

研究主題の実現に向けて、目標を三つ設定した。一つめは、児童自身が既習の力を想起し、目標設定の中で具体的な評価規準を意識し、学び方や考え方をメタ認知していけるようにするため、指導方法等の工夫改善に関する授業力向上を図る実践研究である。二つめは、教科横断的な論理的思考力や表現力が、教科等の間でどのような連携等が行えるのかを実践研究し、アクティブ・ラーニングの能力を育成、活用するカリキュラムを開発することである。三つめは、「読書は学力」合言葉に、学校図書館を活用した課題解決のための調べ学習・読書イベントの実施、外国語活動・ICTの活用の視点を加えた言語環境の整備と活性化を図ることである。カリキュラム開発を行う中で、実践を通して得たポイントについて次に報告する。

3 カリキュラム開発のポイント

はじめにPISA調査における近年の日本の児童の学力の状況等を受けて、これからの時代に求められる「自ら学ぶ力」として井上一郎先生(前文科科学省教育課程課教科調査官)より三つの力を明確にするよう指導を受けた。全教職員で、新たな時代の学力観の共通理解を十分に図った【図1】。そして、児童の自主的学習力育成を主眼として、平成20年度よりカリキュラムを改善し続けている。【表1】改善の中で、成果として子どもの姿に顕著に表れた3点について、具体的手立てを挙げる。



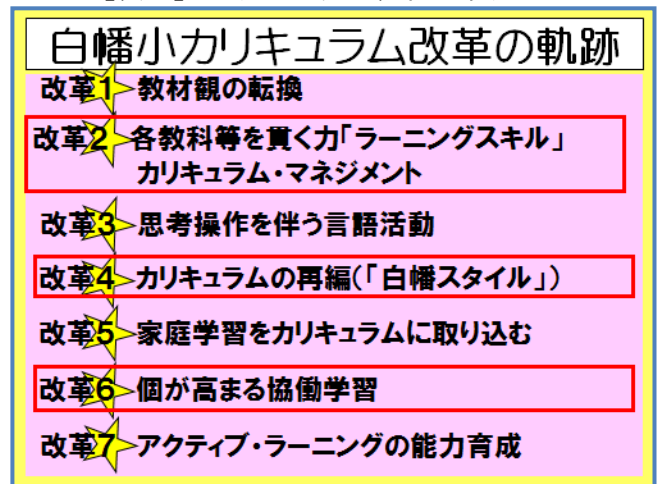
【表1】カリキュラム改革のあゆみ

(1)各教科等を貫くLS【表1-改革2より】

自主的学習力を付けるには、まず、教科書を中核とし自ら必要な本や資料(図書等)を活用した学習活動を取り入れ、国語科の授業改善から着手した。また、児童が進んで調べることのできる「学校の図書館」へと改造をした。『学校の図書館改造プロジェクト』2013/明治図書/井上一郎編著
次に、国語科を基軸に全ての各教科等へ研究を広げた。その教科にも学習の基盤となる能力LS(ラーニングスキル)を育てるために「みんなでやることを決め(条件づくり)みんなで取り組むことをプログラム化して具体的にした。

詳細は、『自学力育成プログラム』2014/明治図書/井上一郎・永池啓子編著 参照 特に、どの子も課題解決に向かって考えていけるように、1時間の学習の中に言語操作・思考操作を意図的に取り入れていくようにした。PWCチャート(ポイント・ワーク・チェックシート)を活用し必ず思考操作を伴う言語活動を工夫している。さらには、自主的な学習を進めるためには、教科書以外の教材として学習材の開発、そして、ノートとの連動が重要となる。本校では、井上メソッド白幡シンキングノートの開発を行った。

【井上メソッド白幡 Thinking Note ; 横浜市立白幡小学校HP 研究紀要CD参照



(2)カリキュラムの再編「白幡スタイル」【表1-改革4より】カリキュラムポスター（HP）

児童が自ら課題を発見していくためには、それまで身に付いた学力や学習経験が前提となる。6年間、反復的系統的に活用されていくよう「白幡スタイル」として整理した。

<p>単元の構造</p> <p>単元の見通しと振り返りを大事にし三次構造とする。</p> <p>◆一次 (学習履歴の確認・豊かな導入・課題設定と計画の協議)</p> <p>◆二次 (課題解決的な学習・思考操作と言語操作を位置付けた学習活動)</p> <p>◆三次 (交流と評価・実生活への意識付け)</p>	<p>一単位時間</p> <p>言語操作・思考操作を伴う協働学習を位置付ける。</p> <p>◆きりとる (学習の目的・課題・進め方の確認)</p> <p>◆くみとる (分かること、分からないことの整理)</p> <p>◆やりとりをする (協働で解決)</p> <p>◆ふりかえる (できたことや足りないこと・次にやりたいことの確認)</p>	<p>児童司会</p> <p>司会進行は学級の子ども全員が行えるようにする。板書も行えるように指導する。</p> <p>◆低学年 (話題に沿って時間の目安をもって進行)</p> <p>◆中学年 (全員が発言できることや相違点や共通点を意識して進行)</p> <p>◆高学年 (協議か討論か、授業のねらいを明確にして進行)</p>	<p>PWCシート</p> <p>3つのシートを機能的に活用しながら学習を展開する。</p> <p>◆POINTシート (ラーニングスキル、各教科の汎用的能力をまとめて活用を図る)</p> <p>◆WORKシート (言語操作・思考操作を行い課題の解決を図る)</p> <p>◆CHECKシート (狙いとする力が身に付いているか、確認する)</p>	<p>A・Bファイル</p> <p>身に付けた力の活用を図る</p> <p>◆Aファイル (ポイントシートをファイリング。教師が作成するものと子どもが作成するものがある)</p> <p>◆Bファイル (単元の学習に関わるシートや資料をファイリングしポートフォリオ化。自らの思考の変容を自覚できるようにする。)</p>
--	--	---	--	---

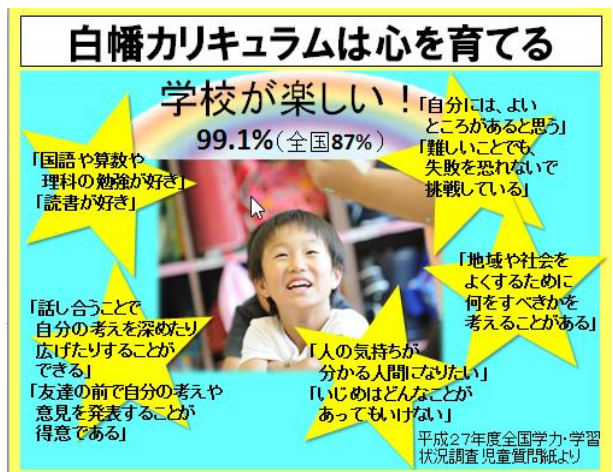
(3)個が高まる協働学習【表1-改革6より】

個の力をより高めるために大切にしてきた協働学習の質の改善に着手した。井上一郎先生より「協働性とは、個別の主体を尊重し他者を関わらせることで個を高めることである」と指導を受け、「意見を出してからが本番」を合言葉に話し合いの目的を明確にして協働学習を展開するとともに、KWLチャート(Thinking Frame)の活用するようにした。つまり、単元に入ったとき、子どもはWhat I know (何を知ってるか) その単元でWhat I want to find out (何を発見したか) 終わるときWhat I learned (何を学んだか) を自ら説明し、自らの成長をメタ認知できるよう指導の工夫改善を図っている。

<p>協働学習の仕方</p> <p>協働学習の仕方を指導する。</p> <p>例) キーワードを出す→メモ・記録→10文字にまとめるなど</p> <p>◆やさしい話し方 ◆あたたかい聞き方 ◆協働学習の役割</p>	<p>課題の質</p> <p>分かりきっていることは話し合う必要がない。話し合う話題や解決しなければならない必要性のある課題等、その質を高め、明確に設定するようにする。</p>	<p>目的の自覚</p> <p>何のために話し合うか目的を明確にして話し合う。</p> <p>◆討論 (意見を整理・分類・比較)</p> <p>◆協議 (結論を一つに絞る)</p> <p>◆論点の整理 (共通点・相違点・対立点・矛盾点)</p>	<p>様式の自覚</p> <p>感想、説明、紹介、推薦、解明、解説、提案、報告など言語様式を自覚して、意見を出し合ったりまとめたりできるようにする。</p>	<p>子ども同士の参観</p> <p>ペアグループで互いの話し合いを評価し合ったり、低学年が中学年を、中学年が高学年の話し合いの様子を観察したりすることで、話し合いの進め方を理解できるようにする。</p>
--	---	---	---	---

4 これからの課題

昨年8月に出版された文部科学省教育課程特別部会の『論点整理』に示されているように、日本の子どもたちが低いとされている、「自己肯定感・主体的に取り組む態度、社会参画の意識等」の課題について、本校のアクティ・ラーニングの能力育成の大きな成果は、右の図のように児童指導に表れた。子どもの人間関係がよくなり、心が豊かになったことがうかがえた。また平成27年度の全国学力学習状況調査の質問紙において、「勉強が好き」はもとより、20%以上高いものに「自己肯定感」・「失敗を恐れず挑戦」で、この学びの高まりが家庭学習の姿にも更に表れるよう、日々の授業の工夫改善に努めていきたい。また、次期学習指導要領の改訂、2030年を見据えて、『論点整理』にもあるように、教科等に固有な知識や技能・教科等で大切にしている見方・考え方・教科等を横断する汎用的なスキル、この1層2層3層のバランスを整備したカリキュラムの開発が求められる。



この1層2層3層のバランスを整備したカリキュラムの開発が求められる。